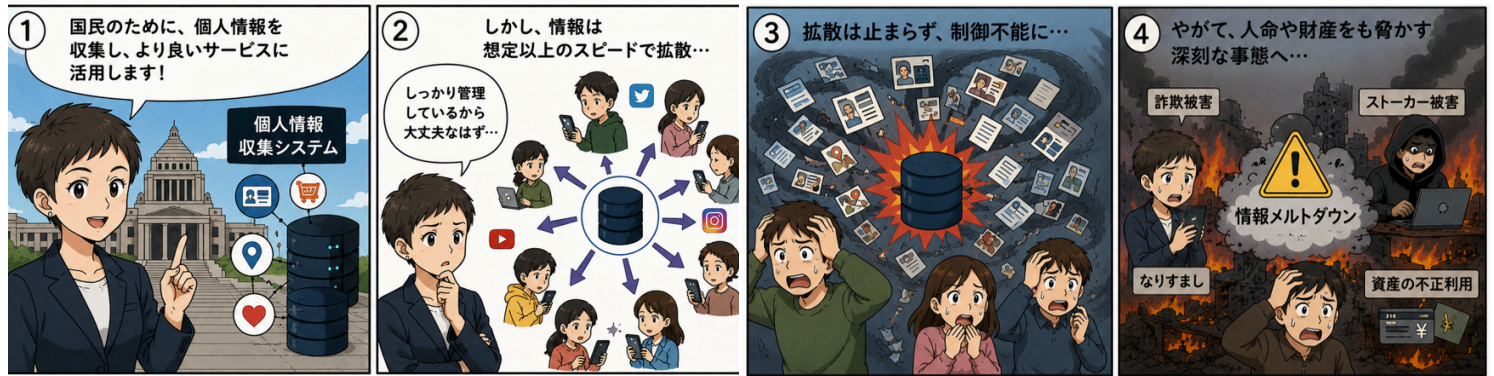


個人情報保護法改正と AI 社会の人権



「♪知らねえ内に漏れていた〜」(注1)

7月10日に改正個人情報保護法が参議院で可決、成立しました。2028年7月に施行の予定です。この法改正は世間ではあまり注目をされませんでしたが、実は私たち一人ひとりの生活を大きく変えてしまう変更が含まれているのです。

背景にあるのはAIの急速な普及です。そのため、AIを使った個人情報の利活用を活発化が求められ、AI開発や統計情報等の作成を目的とする場合、個人データの第三者提供や、公開されている要配慮個人情報の取得について、一定の条件のもとで本人同意を不要となったのです。

特に問題となるのは、要配慮個人情報の扱いです。要配慮個人情報には、病歴、信条、犯罪歴、社会的身分など、差別や偏見、不利益につながりやすい情報が含まれます。これらは単なるデータではなく、その人の尊厳や人生、社会的評価と深く結びついた情報です。

そのような要配慮個人情報の意図的な情報漏洩なら課徴金がありますが、ハッキング等で情報が漏れた場合は、安全対策が極端にザルでなければ、漏れた人への通知義務、安全対策の行政命令程度だけで、漏らしてしまった企業にほぼペナルティはないようです。

自分のあずかり知らぬところで、自分の個人情報が第三者に提供されるのです。それは「♪知らねえ内に漏れていた〜」という歌詞を思い出させます。1988年、PCサクセッションの忌野清志郎が、アメリカのロカビリー歌手エディ・コ克蘭の楽曲『サマータイム・ブルース』をカバーの歌詞の一部です。「♪原子力は安全です」と言っていた国や電力会社を真正面から批判したこの楽曲は、レコードの発売中止や、テレビ・ラジオでの放送自粛などの憂き目に遭いました。今回の個人情報保護法の改正は生活の利便性のために、政治に対して向き合わなければならないことや不都合な真実から目を背けてきた私たちが招いた結果ではありませんか？

注1 『サマータイム・ブルース』(1988年リリース) / RCサクセッション 『♪歌詞出典：MUSIXMATCH』

法律は誰の声で作られるのか

個人情報保護法の改正で、このような重大問題を抱えてしまったのは決定過程がブラックボックスになり、立法機関である国会が形骸化しているからです。

そもそも個人情報保護法は3年に一度の法改正が制度化されており、そのうえで、自民党は2024年5月に『デジタル・ニッポン2024』という文書を公表し、当時の岸田総理に申し入れをしています。さらに、この文書の作成には個人情報を使いたいIT企業経営者など利益を受けたい人たちが中心になっています。

そして、法改正のために2年以上の準備を費やしており、今年4月に法案が閣議決定され、国会に提出された段階で、重要なことは決められてしまっているのです。

国会ではそれを一部修正するか、廃案にするくらいしか、手段は残されておりません。限られた手段で覆すには野党が弱ければ不可能です。こうした決定過程では「誰のため」の決定なのかということになってしまいます。

時代のはざまで私たちの意識の急速な変化をどうとらえるか？

こうしたIT企業経営者などの受益者中心のブラックボックスで重要事項を決めていくやり方は複雑で多様な社会の基盤となる法律を決めるには偏りが著しく発生します。さらに言いますと、今の世界情勢のように「古い秩序は崩壊過程にあって力を失いつつありますが、新しい秩序の形成過程はいまだ見えない」という移行期特有の不安定な時期においては同質的な一部の人たちによる決定は誤りを引き起こしやすいのではないのでしょうか？

具体的には日米関係、戦争が日常化する国際情勢が当たり前のなかでの憲法9条、日本の没落を見せつけられる世界経済という時代の日本社会で、目先の利益に囚われた決定は後々禍根を残すのではないのでしょうか？

そうした目先の利益に左右される動きに対して、私たちは世の中の理不尽さを「自己責任」で片づけるのではなく、社会の仕組みの問題として捉えることです。その仕組みを変えるために政治の問題として考える習慣を身につけるべきではないのでしょうか？そうしていくことで社会の変化をとらえつくし、記帳し、その変化が主権者運動につながっていかない壁の存在を明らかにし、共有していくことが求められています。

そして、個人情報保護法に話を戻せば、AIへの利活用ばかりで、情報の自己決定権はこれからのデジタル社会の基本的人権になりますが、そこが全く明記されてないのが現状です。これでは個人がデジタル化の波にのまれ、それぞれの主体が失われ、個人中心ではなく、システム中心の社会と化す危険性があります。

時代が変われば現実にならなくなったルールをいつまでも守る必要はありません。しかし、変えるのならどこをなぜどの範囲で変えるのが明確でなければならないと思いませんか？

AI社会の個人情報保護とは？

確かに、個人情報の利活用には、社会的な利益があります。しかし、その利益を理由に、本人同意という基本原則を安易に緩めることには慎重であるべきです。少なくとも要配慮個人情報については、通常の個人情報よりも高いハードルを設ける必要があります。

個人情報保護法は、経済成長のためだけの法律ではありません。AIの発展も重要ですが、その土台にあるのは、人が安心して医療を受け、相談し、学び、社会に参加できることです。自分の知らないところで病歴や生活状況、思想信条に関わる情報が利用され、しかもそれを知ることすらできない社会では、人は自由に生きることが難しくなります。だからこそ、今回の改正はAIのための規制緩和としてではなく、人権と技術のバランスを社会全体で問い直す契機として受け止めるべきです。

AI時代だからこそ、私たちにはそれに見合った人権や民主主義の形、ひいては社会の仕組みを再構築していくことが求められています。「便利だから仕方がない」で思考停止するのではなく、未来をつくるのも声をあげるのも社会に生きる私たち自身です。

チームパシュートとは

私たちは、一般社団法人ソブリン・ムーブメントの活動チーム「チームパシュート」です。チームパシュートという名前は、スピードスケートの団体競技に由来しています。この競技では、選手たちが互いを支え合いながら隊列を組み、それぞれの役割を果たしながらゴールを目指します。私たちも同じように、一人ひとりが得意なことや経験を活かしながら、より良い社会の実現に向けて活動しています。

私たちが取り組んでいるのは、「主権者運動」です。政治や社会の課題を誰か任せにするのではなく、自分たちの暮らしと結びつけて考え、学び、語り合い、行動することを大切にしています。発信する人、企画する人、地域で対話を広げる人など、それぞれが自分らしい役割を担いながら活動しています。

社会を変えるのは特別な誰かではなく、私たち一人ひとりです。チームパシュートは、仲間とともに学び、支え合いながら、一歩ずつ未来へ進む主権者のチームです。

